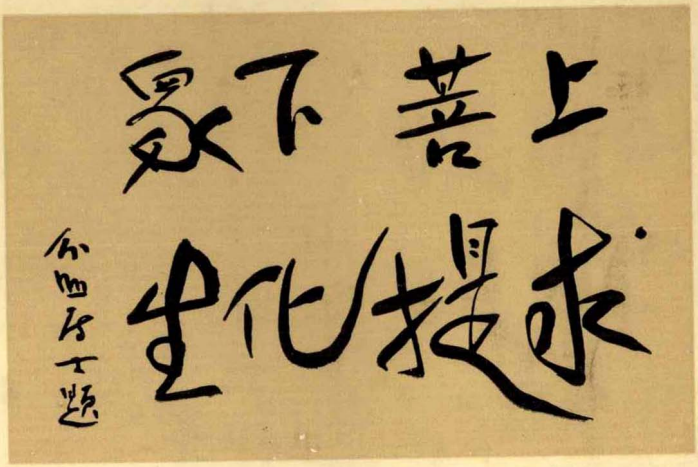
中里介山

孤高の思索者



尾崎秀樹著

勁草書房

中里介山

孤高の思索者

尾崎秀樹著

勁草書房

著者略紹

1928年　台北に生まる
1946年　台北大医専中退
現在　文芸評論家
著書　「ゾルゲ事件」（中公新書）
「大衆文学論」（勁草書房）
「魯迅との対話」（勁草書房）
「旧植民地文学の研究」（勁草書房）
「歴史文学論」（勁草書房）
「修羅明治の秋」（新潮社）
「峠の人 中里介山」（新潮社）
「伝記吉川英治」（講談社）
「吉川英治 人と文学」（新有堂）他

中里介山—孤高の思索者—

1980年10月10日　第1版第1刷発行

©著者　尾崎秀樹
発行者　井村寿二

発行所　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽2—23—15
電話　(03) 814-6861
振替東京5—175253

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。　港北出版印刷・和田製本
＊定価はカバーに表示してあります。
＊無断で本書の一部又は全部の複写・複製を禁じます。
0095—859600—1836

目

次

第一部　評伝

一　歴史的な位置　2
二　多摩の風土　5
三　時代思潮の洗礼　9
四　日露戦後の模索　16
五　「大菩薩峠」の執筆　22
六　孤高の人　28

第二部　論考

政治との対応……34
〝旅〟の思想……49
その歴史認識……67
間の山ぶし考……80
初期作品と雑感文……97
評価の変遷……109

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

第三部　周　辺

玉川上水と中里家……128
都新聞と介山……142
頼朝の死　―中里介山と真山青果―……158
気になる外国人　―バビアと英訳本―……170
挿絵問題の紛争……185
映画化の波紋……202
「自家年表」……225
「大菩薩峠」梗概……263
初出一覧
あとがき

第一部　評伝

隣人より村落へ――村落より都会へ――都会より国家へ
国家より人類へ――人類より万有へ――万有より本尊へ――中里介山

一　歴史的な位置

中里介山の業績にたいする評価は、死後時がたつにつれてたかまっている。大衆文学の先駆的作家として位置づけることは、すでにふるくなった。文学創造の仕事をふくめて、彼の足跡は大衆文学の枠からはみ出している。しいて言うならば、大衆文学の可能性を顕示した作家、あるいは思索家というべきだろう。いずれにしても彼の歩んだ道は、彼自身のものであり、既成の概念を越えた独自なものだった。一見矛盾してみえる表現も、その振幅をしめすものであったに違いない。

介山自身彼の作品を大衆文学とみなされることを嫌ったのは、あまりにも有名である。それは彼の大衆認識の独自性からもきているが、同時にその基底には一種のマスコミ批判があり、述志の思いを托した彼の文学の方向からは、否という答が出されたのも無理はなかった。「昔のことはさて措いて、明治以後に於て斯ういふ運命を負はされた創作家は小説の場合として尾崎紅葉と、夏目漱石とそれから私ではないかと思はれます」（創作及び著作権とは何ぞや）という自負も、そこからきていた。

この介山の自負を裏書きするような言葉が、芥川龍之介にある。芥川は自殺する前年の秋、つまり大正十五年に、友人の佐々木味津三と歓談しながら、大衆文学に転じた佐々木をはげまし、「興味中心の文学を堂々と樹立したら、大事業ぢやないか。ちつとも恥づべきことはないぢやないか。今後百年ののちをみたまへ。もし文芸大辞典を造るものがあつたら現在活躍中の文芸作家は、一二行位しか書かれないかも知れないが、中里介山は二三頁費して書き立てるよ」（大衆文学は無軌道の花電車）と語ったという。芥川は介山をひきあいに出すことによって、佐々木をなぐさめるつもりだったかもしれない。しかし彼の言葉はそれ以上のものをはらんでいる。現在活躍中の純文学作家にくらべて、介山を歴史のなかにおいて高く評価するという発想は、彼自身をふくめて、日本文学の閉鎖性にたいするアンチ・テーゼをしめすものだった。百年を待つまでもなく、芥川の予言が正鵠を得たものであったことは、次第に立証されつつある。

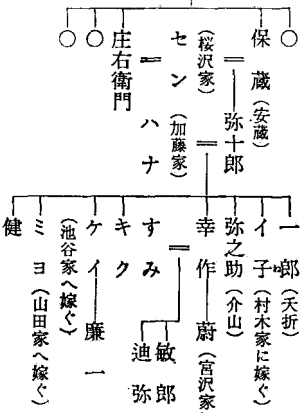
日本の大衆文学は近代文学のひずみにたいする修正を意図するものだった。近世から近代へ架橋される際に無視されたロマンの伝統を、回復する欲求がこめられていた。たまたまマス・メディアの成熟を土台として、マスコミ的性格が急速に付与されていったために、その本来的な方向は曖昧となり、その主体性を急速に失っていったが、大衆文学はもともと近世以来の庶民文芸の伝統をひき、そのゆたかな流れを近代に開花させるべき性格のものだった。介山は三遊亭円朝以来の系譜にたち、文芸の総合的展開をこころみている。未完の大作「大菩薩峠」は介山の試作であり、宇宙認識をしめすものでさえあった。彼の六十年の生涯がこの大作に収斂されている。彼は実人生をこの大作に賭けた。中里弥之助の生涯と、創作された「大菩薩峠」とは、実と虚の関係にありながら、実際にはそれが逆に

なって、思想史の流れの上に投影してみられるのも、そのためではないだろうか。

円朝から介山を経て、戦後に武田泰淳や深沢七郎へとひき継がれる、なんとも得体のしれない文学の地下茎を、私はみる思いがする。この流れをなんと名づけたらよいのか、庶民的怨念の系譜、あるいは修羅の門脈など、言葉としてはいろいろ思いつくが、そのどれをとっても言い表わし得ないなにかなのだ。もし強いて言うならば、それらをトータルで表現するような言葉が必要だ。宮沢賢治や夢野久作までふくめて、私にはその地下の水脈があきらかに感じられる。しかし不幸にして、そのようなサイクルは、これまでの文学史家の認識にはないものだった。

介山の生涯と作品の関係は、実と虚の位置を逆転させたものであると述べたが、評伝はその不思議

中里家系図



な関係式を模索する仕事とならなくてはならない。介山がなにをしたかではなく、なにをしようとしたかが問われるべきであり、なにをしなかったかをふまえることによって、その可能性を見究める操作が、評伝の課題とならなくてはならない。しかしそれは荷が勝ち過ぎる。そこでその問題点だけをあげて、介山の六十年の歩みをたどることにしよう。

二　多摩の風土

中里弥之助は玉川上水の羽村堰に近い多摩川のほとりで、明治十八年四月四日に生まれた。神奈川県西多摩郡羽村三七八、現在の表記でいえば東京都西多摩郡羽村六四〇である。この生家はすでになく、今では河畔の一本杉がわずかにその跡をとどめるに過ぎない。玉川上水が江戸の飲料水と防火用水としてつくられたのは承応二年のことだ。多摩川の水を羽村でとり入れ、四谷の大木戸までおよそ十里の掘割をつくって通した。上水をつくった功労者は玉川庄右衛門と清右衛門の兄弟である。土木業を営む江戸芝口の商人だったという。二度失敗し、三度目に完成した。費用はしめて七千両を越えたといわれる。精米業を営み、水車のある家に育った弥之助は、朝に夕に羽村堰のあたりを眺め、遊び場として過しただけに、その歴史についてもいろいろと聞かされたにちがいない。偶然ではあるが、義祖父の名前も庄右衛門だったことを考えあわせると、介山の生い育った環境がわかるように思われる。

父の弥十郎はすでに述べたように、弥之助が生まれた頃は精米業を営んでいた。家運をささえるための策であったが、順調だったのははじめの頃だけで、次第と衰退にむかい、好きな賭けごともわざわいして田畑を人手に渡し、そのことがまた性格をゆがめるまでになった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

弥之助（介山）はのちにこの父のことをつぎのように回想している。

「父の弥十郎は子供の時分から将棋が好きで且なか〳〵上手であつた、後には村でも一二を争ふ程度になつて、実力三段格位はあつたといふことだが、どんなものか、この地方は所沢の藤吉などといふ棋道の傑物も出たところで、将棋はなか〳〵流行してゐた。父も子供の時分から見やう見まねに覚えて、手筋が甚だよかつたと見えて七八歳位の時に祖父がこしらへて呉れたといふ欅の筋目の堀の深いい〻将棋盤が弥之助の子供の時分まで残つていたが、今はどうなつたかわからない、この将棋上手が父の生涯に害を為せばと云つて、益は与へなかつたと云ふものがある、その頃の習ひで、どうかすると賭将棋にかゝつて、父もそれが為に家伝の田畑を相当人手に渡すやうになつたと云ふ者もあるが、その辺はよく知らないが、将棋には可なり耽つたもので、諸方からの渡り者や、近郷の打手などゝ大分に手合せしてゐるが、晩年どうも徹夜してやるとバクチ打にはかなはない、酒を飲み過ぎると負ける、と云ふやうな事を呟くのを聞いたことがある」（哀々父母）

三多摩は自由民権以来の政治的気風がつよく、政談演説なども活発だったが、父の弥十郎はその方面にあまり関心をしめさず、ときたま政界を揶揄するような狂歌をつくることはあっても、ほとんど政党政派には無関係に過した。人前に出ることも好まず、付合いも悪かったので、その分だけ母が苦労しなければならなかった。身体は頑健で畑仕事に出ることもあったが、仕事着に着かえるようなことはなく、着流しに角帯という姿で鍬や鎌を持って出かけるという、一風変ったところがあった。若い頃はにがみばしったいい男で、仁木弾正と異名をとったこともあった。

家産が傾かなければ、この弥十郎もよい父親として一生をおえたかもしれない。しかし松方デフレ

以後の不況のしわ寄せは、三多摩の富中農層にまでおよび、中里家もそのあおりをくって急速に没落せざるを得なかった。そのどうしようもないいらだちが弥十郎をとらえ、ますます神経質になってそれがやがて病的なものにまで昂進した。家庭不和がおこったのもそのためであり、後に脳溢血で倒れてからは煙管を歯で折ってしまうほどの異常さをしめした。介山は一家離散にいたる模様を、「明治時代の社会現象の一つとも見るべき、中農没落して一家が都会に流亡するの悲劇を、わが家程深刻に見せられたものはあるまい」と回顧している。

母のハナは加藤家の出だった。井伊大老が桜田門で遭難した万延元年の生れである。弥十郎には父親の違う岩吉とトラという二人の弟妹がいたが、ハナは一男四女の三女にあたり、モトとコノの二人の妹はそれぞれ平岡家と栗原家に嫁ぎ、妹のトミは宮沢家に嫁している。ハナが弥十郎と結婚したのは明治十一年のことで、その七年後に弥之助が生まれた。長男の一郎は三つの年に亡くなっている。ハナは男まさりの女性であった。苦労の多い生活が、必要以上に彼女をそうさせたのかもしれない。ハナが嫁いできた頃は、すでに弥十郎は性格の破綻をきたしはじめており、女手ひとつで子どもを育てながら家業をきりまわさなければならなかった。しかしいくらがんばっても、一度タガのゆるんだ家運を女の手で挽回することはできなかった。家をとび出したこともあったという。だが彼女は子どものためを思い、夫の身を案じて家へもどってきた。小田原北条家の落武者の血をひいているといわれるだけに、礼儀作法や物のとり扱いなどにはきびしく、子どもたちにたいしてもいましめることが多かった。

介山は書いている。

「母は『無いが意見』といふことを言ひ〳〵した。これは貧乏ほど大きな教訓は無いといふ意味に使用された。母の言はれた色々のしきたりのうちに『朝縄夜藤』といふ事があつて朝は炉中で縄を燃やすものではない、夜は藤を燃やしてはいけない、といふ事があつた。今でも自分はそれを日常破らないやうにしているが、その出処はまだ分らない」

「母は晩年まで丹念に自分のことは自分でしたのみならず、もう腰が曲つて立居が不自由な時でもお客が来ると一々自分で立つてお茶や食事の用意をしてすゝめるし、また何ぞの手廻りの仕事でも手近な目下を呼びつけてやらせてもいい事まで曲つた腰をのばして一々自分が立つた、そのまめな事は確かに母の特色の一つであつた。艸庵へ来ても、いよいよ動けなくなるまで、草とり庭掃除を楽んでゐた」（哀々父母）

介山は弥十郎の二十九歳、ハナの二十六歳のときの子だ。彼は幼少から青年期へかけて父を好まなかった。憎んだといっていい。その分だけ母親へ傾斜したわけだが、しかし弥十郎が死んでみると、父親の哀しみが次第に理解できるようになり、「父ほど不幸な人は世に二人とあるまい」と思うように変った。父の年になって、はじめて弥十郎のどうにもならなかった悲惨さが、身にしみるようになったのだ。介山はドストエフスキーの筆でも借りなければ、父親を中心としてのかつての苦しい生活を描写することはできないとさえ述べているが、それというのも介山自身の性格のなかに、父弥十郎と同質のものがひそんでいたからではないだろうか。狷介でまた孤独な生きかたを貫いた介山は、内向的なものに傾斜した父親の弱さを知れば知るだけ、自分の血のなかにある同じものを拒み、逆に孤高の態度をとおしたのではなかったか。

その場合、母親のもつねばりときびしさが、介山のささえとなったにちがいない。介山が父と母から受け継いだ性格は、父親の質を内にはらみ、外側を母親の誠実さで包んだものだと思われるが、しかしそういった先天的なものよりも、彼の場合には家庭環境からくる寂寞や、時代状況からくる鬱屈により深い因数をよむことができるように思う。

三　時代思潮の洗礼

介山が両親とともに母親の実家をたよって横須賀へ移ったのは八つのときだ。そこで二年を過し、ふたたび羽村へもどった。介山の少年期につよい影響を与えたのは佐々默柳である。默柳は西多摩尋常高等小学校の校長兼教頭であった。満五歳で小学校へ入学した介山は、そこでこの古武士的風格をもつ人物から深い感化をうけた。尋常高等小学校と名前だけはいかめしかったが、実態は寺小屋に毛の生えた程度のもので、默柳を中心とした一種の塾であった。

佐々默柳は加賀藩士の出身で、禁門の変に参加し、藩からとくに命じられて長崎へ留学したこともあった。明治七年の征台の役には書記役で従軍した。その後高瀬真卿とともに千葉の感化院に勤めたが、機縁があって羽村に腰を据えることになった。厳格をきわめた武士道精神の権化ともみられるこの默柳のもとで、介山は実学の思想を学ぶとともに、天下の経綸を論じる気風を培われた。佐々默柳のようなタイプの教育者は、その当時少なくなかった。たとえば多くの相州民権家をその門から出した小笠原東陽などはその代表的先人であろう。

默柳の塾教育については、「百姓弥之助の話」の第二冊〈塾教育の巻〉にくわしいが、それは寺小屋

式教育から明治教学思想による教育体系のかたまるまでの過渡的な時期の特色を備えるとともに、殖産興業や自由民権へと発展してゆく土壌につながるものであり、介山はその残映のうちに生い育ったといえよう。とくに彼が佐々黙柳から育くまれたのは、高等科三年を卒える前後のことで、佐々家に寄宿し、学ぶようになってからである。生涯独身を貫いた恩師のもとに過し、炊飲まで手伝いながら、多くのものを吸収した。

介山が民権壮士たちの気風の余燼をどこかに残していたとすれば、それはこの黙柳をとおしてではなかっただろうか。弥之助少年は漢詩文を学びたいと願った。しかし明治初期の実学思想にかたまっていた黙柳はそれを許さなかった。弥之助は黙柳のもとに住むようになって、佐々家の蔵書を見ることを許され、収蔵の古典をむさぼるように読んだ。「源氏物語」や「平家物語」を読んだのもこの頃のことだ。当時は少年雑誌もいろいろ出ていたが、それらを愛読するうちに投稿することを思い立ち、月寒の筆名で、「万朝報」に詩を投稿したこともある。明治三十年十一月に「少国民」の〈文林〉欄へ投稿した「さても憂たての世の中や」などをみると、一種の無常感が揺曳しており、寂寞感がはやくから弥之助少年の意識の中に影を落していたことがわかる。

高等科二年を卒業する頃には、九歳から十四、五歳までの村の少年たちをあつめて、学習のための夜学会を催したりしている。彼は佐々黙柳から学んだ塾教育の体験を他へおよぼし、早くから青少年教育に関心を寄せた。そのおりの会則には、「第一条　大いに士気を鼓舞して勉学にいそしまざるべからず」「第二条　断じて若衆達の惰弱なる気風に感染すべからず」「第三条　淫猥なる行為をなせる者は直ちに退会を命ず」などがあったという。

日本近代文学館には介山の実弟にあたる中里幸作の好意により、介山関係の文献や資料がかなりな量寄贈されたが（昭和四十五年四月）、そのなかに学校の賞状や証書類がふくまれていた。明治二十五年四月の横須賀における尋常小学校第二学年修業証書、同二十六年四月の西多摩小学校第三学年修業証書、同二十七年四月の同じく西多摩小学校の優等証および尋常小学校卒業証書、同年十一月の西多摩高等小学校の第一学年前期修業証書、同二八年四月の高等小学校第一学年修業証書、同二十九年四月の第二学年修業証書、同三十年三月の第三学年修業証書および優等証、同三十一年の私立弘象館私学卒業証などである。これらの資料によって、在来の年譜の記載をただすことができるが、私学の弘象館についてはそれ以上のことはわからない。

西多摩尋常高等小学校を卒業した弥之助は、村内の漢学者羽村亀吉の紹介で、麻布の霞町に住む西松次郎のもとに書生として住みこむことになった。羽村亀吉は路傍に馬糞が落ちていると、生徒のことなどはそっちのけで、どこまでも拾って歩くといった奇人で、〝馬糞先生〟の仇名があった。

「亀先生嘗て村黌に鞭を執りし事あり。垢に塗れし田舎縞の着流絆纏を被ぎたるまゝ袴を着くる事無し。同僚児童嘲笑するも亦顧ず。帰れば則ち荒布の如き古股引を穿ち背負籠を肩にして『馬糞拾ひ』に出づ、曾つて一日も怠らざる也。一日一生徒、大呼して失生を嘲つて曰く『馬糞先生！』亀先生之を聞くや始めて喟然として嘆ずるところあり。嗚呼師弟の礼、頽敗一に此に至るかと。即日鞭を抛つて又黌に臨まず」（亀先生）

この亀吉先生は介山たちの少年夜学会で「文章規範」を教えた。田吾作然として肥桶をかつぎながら、「易経」をそらんじていたりして、奇行家をもって知られたが、貧しさは変らず、その日の米にも

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo